地理思想史研究委員会の活動
－とくに1995年ダブリン・シンポジウムについて－

竹内 啓一

1 研究委員会発足の背景

国際地理学連合(IGU)の研究委員会(commission)における地理思想史研究委員会(Commission on the History of Geographical Thought)の設立が正式に認められたのは、1968年のニューデリーにおける総会においてであった。まず、1968年という時点でこの研究委員会が発足した背景について考えてみたい。国際地理学連合が発足したのは1922年であるが、その前身としては、1871年アントワープで開催されて以来、数年ごとに開催されていた国際地理学会議(IGC)があった。このIGCを定期的に開催するために、1919年に創設されたInternational Research Council（1931年にInternational Council of Scientific Unions, ICSUになる）の中にIGUが設立されたのである。IGUは当初から、その定款に研究委員会を設けることが定められていたが、第二次大戦前は、百万分の一での世界図作成とか、農村集落形態研究など、研究委員の数は極めて限られていた。研究委員会の数が増えはじめるのは、1960年のストックホルムIGC以降のことである。ストックホルム大会および1964年のロンドン大会と、会議が多くの地理学者をかかえるヨーロッパで開催されたこともあって、IGC参加者は千人を超えるようになり、大会における部門別の報告のみでなく、会議の前後に国内の他の場所で特定のテーマについて数日間のシンポジウムを開催する方式が定着した。多くの研究委員会が、このようなシンポジウム参加者のイニシアティブのもと、研究組織をスタンディングなものにしたいという意向から発足した。IGCの大会そのものが、参加者の数が増大するにつれて、発表時間も制限され、お祭り的な性格をますます帯びてきたこと、他方では、地理学の諸分野の細分化と専門化がますます進んで、総花的な発表の場では十分に学問の議論をすることができなくなったという事情も、研究委員会を多く発足させる原因となった。研究委員会は、4年毎に開催されるIGC大会および大会と大会との間に開催される地域会議の折りのみでなく、独自の集会を、各地の大学あるいは研究機関の協力を得て開催することになった。研究委員会設立の手続きは、会長および副会長からなるIGU執行部の審議を経て、IGU執行部が総会に研究委員会名と委員長名を提案して承認されるというものである。

IGU内に地理学の歴史に関する委員会をつくるという提案は、最初に1964年のロンドンIGCにおいて西ドイツのHanno Beckの呼びかけに応じて開催された非公式の集会においてなされた。当時、地理学は多くの新しい理論、研究技術、さらに研究のあり方についてのいくつかの反省の登場によって、学問としてのあり方に関する議論が沸騰し、他方では、多くの国において、いくつかの著名大学における地理学教室の閉鎖、学校教育における教科としての地理学の地位の低下という危機的状況のもとにあった。このような学問的および制度的状況のもとで、多くの地理学者が、長い歴史を持つ地理学という知の体系の歴史を探求することによって、自己の存在理由を確認しようとしたのである。すでに述べたように、1968年の第21回IGCで、地理思想史研究委員会の名のもとに研究委員会の設立が承認されたのであるが、委員長はフランスのPhilippe Pinchemel、セクレタリーはイギリスのWalter Freemanであった。

2 研究委員会の歩みの概観

設立承認後の最初の非公式な研究集会は1969年にパリで開催され、参加者はPinchemelとFreemanの他に、KishおよびButtimer（米国）、Babicz（ポー

ランド)、Hard (西ドイツ)、de Dainville および Broc (フランス) であった。そこにおいて、著名な地理学者の伝記シリーズを発行することと、1971 年のブダペストでの地域会議において、ラッツエルおよびヴィダール・ドゥ・ブラーシュについての第 1 回シンポジウムを開催することが決定された。その次の研究集会は 1972 年モントリオール IGC の枠中で開催され、またこの会議では、この研究委員会が後援した Kish,G.(ed.): *Geography through a Century of International Congresses.* International Geographical Union, Commission on the History of Geography, Paris 1972.が会議参加者に配布された。

モントリオール大会の頃から研究委員会設立の申請が非常に多くなり、IGU 執行部の審査も厳重になり、またモントリオール総会において、定款を改正し、研究委員会の他に、執行委員会の承認だけによって設立できる作業グループが設けられた。地理思想史研究委員会は、モントリオール総会においてその更新が認められ、以後、歴代の IGU 執行部および総会に出席する各国の代表によってその存在意義が認められ、1980 年までは研究委員会、1980 年から 88 年までは作業グループ、1988 年から現在に至るまでは再び研究委員会として、一貫して地理思想史研究をその名前に掲げて存続してきた。1980 年から 88 年までは、委員長はバークレーの David Hooson、セクレタリーは Freeman が、1988 年の逝去まで務めた (したがって、1988 年のシドニー大会まで 3 カ月ほど、セクレタリーは欠けたままであった)。シドニーIGC で、研究委員会として再発足してフルメンバーの若返りおよび顔ぶれの更新を図り、委員長に竹内、セクレタリーに研究委員会の設立以来中心的な役割を果たしてきた Anne Buttimer (就任時はルンド、それからオッタワに移り、1992 年以降は出身国のダブリン) がなった。この間、委員長の竹内も所属や勤務地を何回か変えたから、考えてみるとずいぶんnomadicな研究委員会だったことになる。1992 年、顔ぶれを若干変更して更新が認められ、1994 年に竹内は副委員長にしりぞき、Buttimer が委員長に、そしてセクレタリーにはフランスの Vincent Berdoulay が就任した。この変更は竹内が日本での所属を変えたり、学会長になったりして忙しくなり、また英語での通信やニュースレターの作成に疲れはてたこと、そして 1996 年のハーグ大会において Buttimer を IGU 副会長に選出するするためには、研究委員会委員長の実績を持っていた方が有利であろうという配慮にもとづくものであった。

モントリオール以降は、IGC の機会には必ず、大会開催地とは異なる都市でシンポジウムを開催してきた。すなわち、1976 年の National Schools of Geography をテーマとするレニングラード・シンポジウム、1980 年の The Languages of Geography をテーマとする京都シンポジウム、1984 年の The Role and Image of Geography in Different Countries をテーマとするジュネーヴ・シンポジウム、1988 年の National Identity and the History of Geography をテーマとするブンダヌーン・シンポジウム、1992 年の Discovery をテーマとするフレデリックスバーグ・シンポジウムである。地域会議はそれぞれ地域的なテーマを掲げているため、研究委員会の集会のテーマも限定されることが多いが、1978 年ラゴスでは非公式な集会を、1982 年リオデジャネイロ、1986 年バルセロナでは、それぞれラテンアメリカおよび地中海諸国における地理学の学説史および社会史に関しての、研究委員会または作業グループ主催のシンポジウムが開催された。

地理思想史研究委員会の歴史の中で特筆すべきことは、1976 年に Pinchemel の尽力で国際科学史科学哲学連合 (IUHPS) への研究委員会の加盟が認められたことである。これによって、IGU においては作業グループであった期間も IUHPS においては研究委員会であり続けたわけであり、また、IGU からの年間 1,000 ドルの活動資金以外に、IUHPS の科学史部会 (DHS) からも年間 300 ドルの活動資金を得ることになった。1977 年のエディンバラにおける第 15 回国際科学史会議において、研究委員会が主催するパラダイム移行に関する地理学史部会を開催以来、4 年毎の国際科学史会議、すなわち、1981 年のブカレスト、1985 年のバークレー、1989 年のハンブルク、1993 年のサラゴーサにおいて地理学史の部会が必ず設けられ、研究委員会はそれを主催するか、少なくとも何人かのメンバーが報告者、座長として参加してきた。もう一つの重要な成果は、研究委員会の発足以来の懸案であった地理学者の伝記シリーズが、1977 年ロンドンの Mansell 社から *Geographers: Biobibliographical Studies* として刊行されはじめたことであろう。第 1 巻は Freeman、Oughton と Pinchemel が、第 2 巻から第 4 巻までは Freeman と Pinchemel が、第 5 巻からは第 12 巻までは Freeman が、Freeman の死後、第 13 巻からはアメ

リカにいる Martin が編集にあたってきた。年 1 冊発行を目標にしてきたが、発行されなかった年が若干あり、1995 年に第 16 巻が発行されている。このシリーズの発刊に先立つ準備期間において、このシリーズで取り上げる、地理学者とは何であるかという議論が研究委員会内部でさかんになされ、結局、教育や研究者組織の中で地理学者として社会的に認知された者のみでなく、環境、集落、あるいは社会の空間的側面に関する著作や実践をのこした者という広義の地理学者と理解すること、近代地理学を主とすること、欧米の地理学者に限定しないことが合意され、執筆のためのガイドラインおよび統一した執筆体裁がまとめられた。

Geographers: Biobibliographical Studies が、研究委員会の主要な、そして継続的な出版物であるのに対して、研究委員会が主催あるいは講演したシンポジウムに由来するいくつかの出版物も現在までに刊行され、また企画されているものもいくつかある。レニングラード・シンポジウムは Babicz, J. (ed.): *Ecoles Géographiques. Congrès International de Géographie*, Organon 1980 としてまとめられているし、Babicz はジュネーブ・シンポジウムのペーパーのいくつかをも、このポーランドの雑誌 Organon に収録している。研究委員会は、1979 年にネブラスカのリンカンで開催されたアメリカのアカデミー地理学の歴史に関するシンポジウムを後援したが、この会議の成果は Blouet, B. (ed.): *The Origins of Academic Geography in the United States*. Archon Books, Hamden Conn 1980 として出版されている。エディンバラで読まれたペーパーの大部分は、Stoddart, D. R. (ed.): *Geography, Ideology and Social Concern*. Blackwells, Oxford 1981 に採録されているし、一部は雑誌 Progress in Human Geography に掲載された。GeoJournal 1992 年第 2 号の *History of Geographical Thought* 特集号は Buttimer の編集によるものであるが、1988 年のブンダヌーン・シンポジウム、1989 年ハンブルクの Geography and State に関するシンポジウム、1990 年の北京地域会議における Environmental Awareness in East Asian Countries のシンポジウム、1991 年ユトレヒトの Geography of Professional Practice に提出されたいくつかの論文を核にしたもので、1988 年から 1991 年までの研究委員会の活動記録ともいえる。Buttimer は 1977 年のエディンバラ会議で、senior geographers へのビデオ・インタヴューを国際的に展開することを提案し、研究委員会としてもそれを支持することを決定した。彼女は、Hägerstrand の協力をえて、極めて積極的にビデオによる収録作業を進め、1980 年の京都シンポジウムでもその一部を上映したが、彼女の 2 つの著作 *The Practice of Geography. Longmans*, New York 1983、および *Geography and the Human Spilit*. John Hopkins University Press 1993 は、その素材あるいは背景をこのビデオプログラムに大きく依拠している。ブンダヌーン・シンポジウムに提出された論文を主体にして、1994 年には二冊の書物 Hooson, D.(ed.): *Geography and National Identity*. Blackwells、および Godlewska and Smith(eds): *Geography and Empire*. Blackwells が出版された。

ユトレヒト・シンポジウムのプロシーディングスは、オーガナイザーの Berdoulay と Hans van Ginkel の編集で、Nederlandse Geographische Studies の一冊として近く刊行される予定である。1993 年のサラゴーサ・シンポジウム Geography's Gatekeepers、1994 年のプラハ・シンポジウム Text and Image: Construction of Regional Knowledges に提出された論文を主にして、*Text and Image. Construction of Regional Knowledges* という本の編集が、目下 Buttimer と Stanley D.Brunn によってすすめられている。1994 年 2 月にマラケシで開催された研究委員会のシンポジウム Géographie, colonisation et aménagement の記録は、オーガナイザーの Ahmed Bencheikh、Berdoulay および Oliver Soubeyran によって編集作業が目下すすめられている。

研究委員会は 1988 年シドニーで IGU の歴史の編纂・発行を決定し、この仕事のコーディネイションを Pinchemel に委嘱し、IGU から資料調査のための資金援助を受けたが、Marie-Claire Robic、Mechtild Roessler を主にするこのプロジェクトチームは、ロンドンの RGC 内の IGU アルカイブおよびパリの ICSU のアルカイブ（残念ながら、ここでは IGU 関係の多くの文書が廃棄処分された）などにもあたって、原稿をまとめた。本文の約三分の一が英語、約三分の二がフランス語の *History of IGU* は、1996 年のハーグ IGC に間に合うよう、パリの Editions L'Harmattan から *Histoire des sciences humaines* シリーズの一冊として刊行される予定である。

1988 年シドニーにおいては、このほかに、世界各国の地理学に関するアルカイヴの目録 *World Directory*

of Geographical Archives を作成することが決定され、1988-1991 年は Martin と Max Linke が責任者になり、1992 年以降は Martin と Armstrong が責任者になって作業が進められている。これは資料の散逸を防ぐためにも、緊急かつ必要なことであるが、大変な仕事であり、各国の研究者の協力が必要である。研究委員会のニュースレターにその成果の一部を連載してきたが、1996 年ハーグ IGC には、まとまった形での中間報告が提出されるはずである。

この研究委員会の出版物としてはニュースレターがあるが、1987 年までは計 7 号までが出ただけで、刊行はかなり不規則であった。1988 年以降は毎年 12 月に NEWSLETTER / BULLETIN を規則的に発行し、研究委員会の活動報告のみでなく、フルメンバーおよび通信会員の著書や地理学関係のアルカイブの紹介なども行っている。また、多くの研究委員会が英語でだけニュースレターを発行しているなかにあって、この研究委員会はかたくなななまでに、二言語主義の伝統を守り、英語版とフランス語版を同時発行している。

3 研究動向および参加者の変遷

28 年の歴史を持つ地理思想史研究委員会がシンポジウムあるいは出版物で取り上げてきた研究テーマには、いくつかの一貫性と変遷が見られる。また、研究集会に出席したり、通信会員になったりしている地理学者を仮に研究委員会への参加者と考えると、世界各国にあって、アカデミー地理学に限定しないという意味での、広い意味での地理思想に関心を持つ研究者すべてが、この研究委員会の参加者であるわけではない。世界の地理思想史研究者の部分的な支持しか得ていない点に、この研究委員会の大きな問題点があるわけであるが、28 年の間には当然のことながら、世代交代、そして参加者の顔ぶれ、研究動向の変化が見られる。

発足以来、1970 年代を通じての研究委員会の目的には一貫して地理学者の伝記の編纂ということが挙げられており、研究委員会の委嘱を受けて P.Claval が 1972 年にまとめた *La Pensée géographique. Introduction à son histoire*, Paris, SEDES を見ても、関心はもっぱら欧米のアカデミー地理学の歴史であったことが分かる。1976 年までのフルメンバーにはドイツの Beck が名前を連ねていたし、Hard なども集会に参加していたが、1973 年頃から実質的な運営は Pinchemel、Babicz、Freeman、Kish の 4 人によってなされていたようである。ドイツからのフルメンバーとしては、1976 年から 4 年間は J. Schmithüsen、1980 年から 4 年間は M. Büttner が名前を連ねていたが、Schmithüsen がレニングラード集会に参加したこと、Büttner が *Geographers: Biobibliographical Studies.* にルネッサンス地理学者について寄稿した以外には、なぜか彼らは積極的に研究委員会の活動に参加することがなかった。このようにして発足後の 2、3 年を除いて、ドイツ語圏の研究者の積極的参加が得られなかったことは研究委員会にとっての大きな弱点であった。この弱点を克服すべく、1988 年からはハレの Max Linke にフルメンバーとして参加してもらい、彼自身、東西両ドイツの地理学史研究者との関係修復に熱心であったが、ドイツ統一後、秘密警察に関係していたという理由で大学から追放され（真相は知りようがないが、旧東ドイツで公職からのパージがかなり魔女狩り的になされたことはたしかである）、彼の推薦もあって 1992 年からはミンスターの若い Ute Wardenga がフルメンバーになっている。

Geographers: Biobibliographical Studies への寄稿に関しても国による偏りが見られる。ラテンアメリカ、アフリカの地理学者はほとんどカヴァーされておらず、ヨーロッパでも、イタリア、スペインに関しては、Kish が R.Almagià について書いた以外は皆無である。

フルメンバーの数は、IGU 定款の改訂にともなって少しずつ増え、現在は 10 名であるが、委員長を含めたフルメンバーは、1 つの国から（国籍ではなく IGU 総会開催時の勤務先）2 名以上を出してはならないことになっている。IBG には、1970 年代から地理学の歴史および哲学の研究部会があり、活発に活躍しているが、Freeman が形而上学的な議論に走りがちなこの研究部会に反感を持っていたこと、そして同じイギリスから Freeman 以外にもう 1 人フルメンバーを出すことができなかったことのために、IGU の地理思想史研究委員会は IBG のグループと疎遠であった。1988 年以降、ベルファストの D. Livingstone をフルメンバーに迎え、彼および Buttimer の個人的尽力によって、ようやく最近になって関係が修復されつつある。アメリカ合衆国においても、アカデミー地理学の学説史から広義の地理思想史に至るまで研究者の数は多いが、学派および個人間の対立がかなりあり、Kish のあとは委員長 Hooson、*Geographers: Biobibliographical Stud-*

*ies*の編集責任者 Martin をフルメンバーにしてきたため（3人とも地理学者としての形成はフランスおよびイギリスにおいてである）、他のアメリカ人フルメンバーを加えることができず、研究委員会が広範なアメリカ人研究者の支持を得ていないという問題が、現在でも存在する。

1968 年の設立以来、この研究委員会のフルメンバーは 10 年間にわたりヨーロッパおよびアメリカで働く地理学者であり、基本的に欧米地理学の研究を志向していたことがわかる。1978 年、エディンバラ・シンポシウムの折りのビジネス・ミーティングにおいて、私は3年後の京都シンポジウムにおいてはヨーロッパの地理学に限定されない、さまざまな文化のもとにおける地理思想をテーマにしたいこと、そして地図などグラフィックな表現手段をも含めた言語の相違、ランガージュの相違を問題にしたいこと、そのためにも、日本人をフルメンバーにすることを提案し、さいわいフルメンバーポストに空席があったので、非欧米世界から最初のフルメンバーに水津一朗がなった。それまでは研究委員会のビジネス・ミーティングは毎年1回、ヨーロッパのどこかの都市で開催されていたのである。水津の後を受けて、1980 年からは竹内が作業グループのフルメンバーになり、1984 年にはアジアからもう1人、北京の侯仁之がフルメンバーになった。現時点で振り返ってみると 1980 年の京都シンポジウムは、プロシーディングスは出版されなかったが、欧米地理学を相対視する契機になったという点で、また、ラング以外のランガージュで表現された地理思想を取り上げることによって、制度化されたアカデミー地理学以外の地理思想をも研究の射程に入れるようになったという点で、研究委員会の歴史にとって画期的な集会であった。シンポジウムの準備にあたった当事者の私がそう考えるのではなく、外国からの参加者の多くがそのように評価しているのである。日本の研究者にとっても、京都シンポジウムは画期的な意味をもったのであり、水津を研究代表者にしてその準備にあたった科学研究費グループは、日本において、地理学説史や地図史に限定されない広義の地理思想史研究の地平をひらき、周知のように、科研費グループは、研究代表者をかえ、世代を若返らせながら、現在に至るまで続いているのである。

1988 年にシドニーIGC で研究委員会として再発足した際の4年間のテーマとしては、Academic, Official and Folk Geographies: Global and Local Concerns が掲げられたが、これは明らかに、京都大会においてその契機が与えられた地理思想研究の射程の拡大、欧米中心主義からの脱却を意味する。1988 年に発行された研究委員会のニュースレター8号において述べられている研究課題の一部を以下に引用する。「我々の研究委員会がその歴史を跡づけようとする『地理思想』は、それゆえ、アカデミーの世界で作り出されたそれに限定されるものではない。それはまた、自然資源と人間居住の空間組織の支配と管理のための権力の側からの政策の根拠として、明示的であれ暗示的であれ役立つような地理思想をも含む。それはさらに、さまざまな信仰体系と民族的伝統の影響下にある地理思想をも含む。・・・地表の歴史地理のなかで析出される地理思想は、これらの多様なメロディー間の共鳴と緊張に由来する累積的な結果であると考えられる」。

このように、地理の思想をアカデミー地理学者のものだけでなく、権力者のそれ、さらにはフォークの次元のそれにまで拡大し、重層する多様な空間的次元の地理的知識、あるいは地理的イマジネーション形成の、いわば社会史にまでその研究の範囲を広げたことについては、批判あるいは反対も強い。アカデミーの世界において確立されたディシプリンの学説史の研究をもっと重視すべきであるという批判は、フルメンバーのなかでも、例えば Martin などによって主張されているが、アカデミー地理学に関してもコンテキスチュアルなアプローチを主要とする立場が支配的であるので、バルセロナの H. Capel に由来する制度化などの概念を用いた社会史的な研究が強調されることになる。地理学のゲートキーパーの役割を議論した 1993 年のサラゴーサ・シンポジウム、さまざまな時代における、さまざまな文化のもとでの地理的知識形成の過程を比較検討した 1994 年夏ののプラハ・シンポジウムは、そのような社会史あるいは社会学的アプローチにかなり傾斜したものであった。

「科学の社会史」あるいは「科学の社会学」を志向した研究集会とならんで、1988 年以来の地理思想史研究委員会は、地理的知識の応用あるいは自然資源の管理や集落計画の比較文化史的研究をテーマにした一連の研究集会を開催してきた。これは、IGU が 1988 年以来グローバル・チェンジに関連するテーマを重視したことに対応したものでもあるが、このようなテーマをとりあげる場合には、研究委員会の重要なテーマで

ある権力者あるいはアカデミーの地理思想とフォークの地理思想との緊張関係が重要な問題になる。国家と地理学の関係を問題にした 1989 年のハンブルク・シンポジウム、地理学の応用あるいはプラクショナーの系譜を問題にした 1991 年のユトレヒト・シンポジウム、millieu（風土）の理論と計画を問題にした 1994 年2月のマラケシ・シンポジウムがそれである。

1995 年夏には、ハバナで IGU の地域会議、モスクワで「グローバル・チェンジと地理学」をテーマにした IGU 協賛の会議、サンクトペテルブルクでのロシア地理学協会創設百五十周年記念会議が相次いで開催され、はじめの2つについては、地理思想史研究委員会はそれぞれの会議のオーガナイザーに協力して Geographical Ideas, Education, and Sustainable Development および Global Changes and the Evolution of Geographic Thought と題するセッションに何人かのメンバーが出席し、サンクトペテルブルクでは Hooson が講演を行い、大変に忙しい夏であった。そのようななかにあって、研究委員会が最も力を注いだのは Livingstone と Buttimer とがオーガナイズした Nature, Culture, and the History of Geography と題するダブリン・シンポジウムであって、文化と自然、社会と環境、生活と土地の関係という、地理学に伝統的なテーマを取り上げたという点では、ハンブルク、ユトレヒト、マラケシでの議論を継承するものであるが、さまざまな場所、さまざまな時代的コンテキストのもとで自然および文化の概念化がどのようにしてなされたのかを分析するという点では「地理学の社会史」という関心を継承するものでもあり、1988 年以来の地理思想史研究委員会の活動をしめくくるという意味をもつものであった。

4 ダブリン・シンポジウム

1995 年 7 月 15 日から 20 日の間、このダブリン・シンポジウムには 16 カ国から 46 名の参加者があり、24 の報告がなされた。参加者が週末の割引切符を入手できるよう、プログラムは 7 月 15 日の土曜から組まれていたが、15 日には夕方、会場および宿舎のあるアイルランド国立大学ダブリン校から歩いて 5 分の Buttimer の自宅でレセプションがあっただけである。私は当日の朝東京を発っていたので、だいぶ遅れて到着したが、アイルランド国立大学コーク分校を卒業以来、アメリカ、フランス、ベルギー、アメリカ、スウェーデン、カナダと、ほぼ 30 年間渡り歩いてきたアンも、ようやくダブリンの地理学教室の主任として安住の地を見いだした様子であったようである。ルンド大学をすでに引退した夫ベルトラムもダブリンの工学部で非常勤講師をつとめ、当地での生活をエンジョイしているようであった。翌 16 日(日)は、3つの日帰り巡検（ダブリン市内、南方のウィックロウ農村部、北方のドロヘーダ周辺部遺跡郡）がなされた。私はアイルランドには 1964 年以来何回か来ているし、72 年から 73 年にかけては 6 カ月ほど滞在したことがあるので、近年における農村の変化についての説明を受けたかったのでウィックロウ巡検に参加した。案内したのは、地理学教室のスタッフの 1 人 W. Nolan であった。

ペーパー・セッションは 17 日(月)朝、学部長の歓迎挨拶に続いて開始された。Livingstone の主旨説明の後、Nature, Culture and Geography と題された第 1 セッションが Buttimer の座長のもとでひらかれた。最初の報告は、D. Hooson: Clarence Glacken's Ideas about Nature and Culture で、バークレーの地理学教室の所有する資料に依りながら、*Traces on the Rhodian Shore* は 18 世紀までの西洋思想における自然と文化の関係についての思想史をまとめたものであったが、Glacken は病身にもかかわらず仕事を続け、19 世紀、20 世紀についてもかなりの遺稿を残していたことを報告し、Glacken の「自然の中に占める人間の地位」に対する関心および環境倫理は、1930 年代恐慌時の開拓計画への関与の経験およびバークレーの歴史学者 H. Teggart との交友に由来していることを指摘した。次の竹内の Yaichiro Yamaguchi(1902-), Self-trained Geographer in Natural Disasters and Folk Culture は、2カ月後に『一橋論叢』114 巻第 3 号に発表された「山口弥一郎の地理学」とほぼ同じ内容であるが、夭折した山口貞夫、佐々木彦一郎など、1930 年代の日本のアカデミー地理学は日本民俗学派とかなり密接な関係を持っていたこと、1959 年に東京文理科大学に提出された山口弥一郎の博士論文はアカデミー地理学の枠内に自分の学問を押し込んだために、1943 年の著書における多くの優れた指摘が脱落したり背景に押しやられたりしてしまっていることを、日本語版におけるよりも強調したものであった。ボローニャ大学の F. Farinelli の Nature et culture dans l'Erdkunde は、英語で報告がなされ、A.von Humbolt から Ritter を経て Schlüter

に至るドイツ批判地理学の系譜に注目しながら、Ritter の比較地誌における実証主義の分析を行ったものであった。

第2セッションは Livingstone の座長のもとに、Geographical Knowledges across the Centuries と題され、時代および場所に関して広範にまたがる3つのペーパーが読まれた。ピカルディ大学の J.F. Staszak: Phusis et numos dans la pensée grecque: L'exemple de la pensée du milieu chez Hippocrate は、パリ第四大学で Claval のもとで提出された博士論文にもとづくもので、ヒポクラテスの環境理論が、今まで理解されてきたような環境決定論的あるいは単純な気候帯理論に還元できないものであることを指摘したものであった。P. Gould: The Emergence of Apocalyptic Faith as a Regional Ontology for Nature Human Relations は、ユダヤ・キリスト教的伝統における、自然と人間を対置する黙示録的宇宙感はせいぜい最近二千年だけのものである、それ以前にはもっと普遍的な現象論的空間存在論が支配していて、ナイル川・インダス川・中央アジアステップに囲まれた地帯で、後になって黙示録的自然感が形成されたと指摘する壮大な議論であった。第3の報告者 W. Wilczynski は、1991 年以降、この研究委員会のシンポジウムには欠かさずに出席するポーランドの若い研究者で、これまでは社会主義体制のもとにおけるポーランド地理学の堕落を糾弾するのに熱心であったが、今回の報告 Philisophies of the Nature-Culture Unity は、西欧思想の伝統の中で自然と文化、理性と感情とを調和させようとする認識論的試みを展望し、地理学の科学としての独立は、このような貴重な認識論的な試みから自らを切り離すことであったと指摘するものであった。

午後の第3セッション Nature and Geographical Science は竹内が座長で、最初の報告者 P. Bowler は、多くの地理思想史研究者がいるベルファストのクイーンズ大学所属で、今回の報告 Metaphors of Imperialism in post-Darwinian Biogeography は、1876 年の A.R. Wallace の *Geographical Distribution of Animals* 発行以来、生物種が最も進化したのはユーラシア大陸であり、それに次いで北アメリカであったという生物地理学説が流行し、このメタファーがヨーロッパ列強のアフリカおよび太平洋地域への帝国主義的進出を正当化するのに用いられたと説くものであった。2番目の報告者、パースの P. Armstrong も長年にわたるこの研究委員会の集会の常連で、C. Darwin に関する研究が多いが、今回の報告はイギリスおよびその植民地における聖職者による博物学的研究の系譜に注目した The English(and Colonial) Parson-Nnaturalist: An Element in the Geographical Tradition?というもので、その伝統は 16 世紀以降あるが、彼らのネットワークも整備された黄金時代は 19 世紀で、同時に進化論に対しては非常に多様な反応が見られたこと、聖職者による博物学的研究がその後の環境論思想に与えた影響が指摘された。これに続いてマドリド自治大学の G. Luna によって、彼女および同僚による以下の3つのペーパーの紹介がなされた。すなわち、N. Ortega-Cantero: Naturalistic Conceptions of Geography in Spain, 1900-1936、G. Luna and J.A. Rodriguez-Esteban: Nature and Culture and Teaching in Geography in Spain (1900-1936) 、J. Gomez-Mendoza and J.A.R.Estaban: Nature and Culture and the Spanish School of Geography (1940-1970)で、スペインの現代地理学のなかで自然と文化についての議論をたどるとき、市民戦争が重要な画期になること、市民戦争前においてはドイツおよびアメリカ合衆国地理学の影響がかなり見られたが、内戦後、1970 年前後に「新しい地理学」の影響が圧倒的になるまでは、フランス地理学の影響が圧倒的に強く、歴史主義的な偏向さえ見られたことが指摘された。

第4セッションは Culture, Nature and Geography と題され、Berdoulay が座長で、最初の報告はワルシャワ大学の F. Plit の Le "néodéterminisme tropical" polonais: L'Homme et son environnement selon les géographes de l'Université de Varsovie で、彼によると、1960 年代と 70 年代のポーランド地理学は計量革命をうけいれたが、他方では両大戦間の古めかしい可能論が隆盛を極め、現地調査に赴くことなく熱帯諸国における人間と環境との関係を文献および地図を用いて論じていたとのことであり、報告者はこれに否定的な評価を加えた。2番目の報告は、P.Gruffudd: Regional Patriotism: the Moral Geogaphy of H.J. Fleure で、イギリスにおける近代地理学創設者の一人である Fleure は、1917 年から 1937 年までウェールズの大学に在職し、「生物学的社会主義」とでもいうべき反大都市主義、反工業主義を説き、政治的主張として地方分権的地域主義を唱えていたことが指摘された。この日は午後6時から、都心部のマンションハウスで市長

のレセプションがあり、その後近くのホテルでの会食会があった。

翌18日(火)午前中は、会場を博物学関係の図書を多く収蔵するマーシュ・ライブラリーに移して開催された。図書館長のM. McCarthy女史の挨拶につづいた第5セッションは、Archival Sources for the History of Geographyと題され、座長はアイルランド国立大学ダブリン校のA.Simmsであった。最初のキーノート報告は、ダブリンのトリニティ・カレッジ元教授J. AndrewsによるArchives and the History of Geographyで、最近の地理思想史、地理学説史研究が、形而上学的な議論に走り、地理学者の講義ノート、試験問題と解答用紙に至るまでの基本的史料の探求と保存をおろそかにしていることに対する警告であった。アイルランド国立大学ダブリン校のS.Ó'Catháin: Storytelling Traditions and the Moutain Booleyは、史料と口承文学を吟味しながら、アイルランド山地におけるトランスヒュマンスについて考察したものであった。これに続いてオックスフォード大学のJ. Ryanは、Photography, Geography and Empire: The Victorian Photographic Exploraions of John Thomsonについて報告したが、これはヴィクトリア期の写真家J. Thomsonによる極東キプロスの写真を分析した彼の博士論文にもとづくものであり、多数の写真史料をスライドで示しながら、地理的知識の1つの形態である写真を通じて、ヴィクトリア文化とイギリス帝国主義との関係を指摘するという意欲的なものであった。

館長宅でのコーヒーブレイク後の第6セッションは、Traditions of Geographic Enquiryと題され、モナシュのPowellが座長で、第1報告はバイロイト大学のU. LindgrenによるPhilip Melanchthon and Geography in the Sixteenth Centuryで、ドイツ・ルネッサンス期の人文地理学者Melanchthonの数理地理学および地図学における業績を再評価したものであった。17世紀に関しては、これに続いてエディンバラ大学の地理学科の主任であり、IBGの地理学史・地理哲学部会でも活躍しているC. Withersが Geography, Natural History, and the Culture of Useful Knowledge in the Late Seventeenth Centuryと題して報告し、地理学および博物学による世界の経験的な記述が、有識者によって哲学的および政治的有効性をもつものと考えられていたことが、とくにスコットランドを事例にして指摘された。クラーク大学のW. Koelsch: Nature and Culture in the Classical Oxford Geographersは、19世紀末から20世紀初頭にかけてのオックスフォードの古典学者および歴史家によるギリシャ・ローマ世界についての歴史地理学的な記述を分析しながら、当時のイギリスの大学における自然と文化との関係についての考え方の特色を指摘しようとしたものであった。午前のセッション終了後、徒歩でダブリン都心部の見学がSimmsの案内でなされ、ドゥブリニア中世博物館で昼食の後、会場をトリニティ・カレッジに移して午後のセッションが開催された。

第7セッションはConstructiong Academic Geographyと題され、座長はHoosonで、最初のJ.M. PowellのDisputing Dominion: Environmental Sensibilities, Historical Consciousness and Academic Discource in Australia, 1900-1950は20世紀前半のオーストラリアにおける環境への関心、ナショナル・アイデンティティ形成における歴史意識、アカデミーにおける言説の3者の関係を分析し、この3者の間のずれが、第二次世界大戦後の多文化主義の台頭によってますます拡大していることを指摘した力作であった。南アのW.S. Barnard: Africaner Geographers and the Apartheid Discourceは、1935年から1975年の間における2つのアフリカナー地理学者世代のアパルトヘイトに関する言説の相違を分析したものであった。ヨーロッパで生まれ、ヨーロッパで教育を受けた第一世代は地域研究を重視し、人種差別主義に懐疑的であったが、彼らの弟子たちの南ア生まれのアフリカナー世代は地理学の応用を重視し、アフリカナー・エスタブリッシュメントによって地理学の有効性が認められないことに不満を持っていたと指摘した。ラフバラ大学のM. HeffemanのThe Early Years of the Société de Géographie de Parisは創設時のパリ地理学協会が、現実的なそしてメタファー上の土地としてのティンブク探査を行ったことを例に取り挙げながら、他者の空間に関する知識の生産と正当化に関する基本的な問題を提起した。セッション終了後、大学図書館で中世のケル書の見物および古書庫の見学がなされ、またこの機会にトリニティ・カレッジの地理学教室が、1930年代から40年代にかけてここに勤務してアイルランドに関する多くの著作をのこし、その後地理思想史研究委員会のセクレタリーを20年にわたってつとめた故W. Freemanに関する展示を、われわれのために特に準備してくれた。

次の第8セッションは、Nature, Culture and Territory と題され、アメリカから参加した G. Dunbar が座長を務めた。フィンランドの A. Paasi は、すでにこの研究委員会で地理学の社会史に関する報告を何回かしてきたが、今回は Nature, Culture and Geopolitics: Geographers and the Social Construction of the Finnish Territory と題された報告で、フィンランドの国土およびその国境に関する知識およびイメージ形成に地理学が果たした役割を、特に学校教科書の分析を通じて分析したものであった。国境に関しては、自然国境という考え方が旧ソ連との国境紛争において大いに利用された。イスラエルの H. Goren の The Peaceful Crusade: Plans for Cristian Cultural 'Reconquista' of the Holy Land in the Ninteenth Century は、19 世紀にヨーロッパのいくつかの組織および個人によって聖地をキリスト教世界の支配下に置こうという「平和的十字軍」計画が存在したこと、それがヨーロッパ人のパレスチナに関する地理的知識形成に果たした役割を分析したものであった。これに続いてカタロニアの L. Riudor が、J. Nogué-Font および M.D. Garcia-Ramon と共同のペーパーImages of Colonial Morocco: Nature, Culture and Society を読んだ。スペインにとって 1898 年の最後の海外植民地喪失以降、オリエンタリズムの対象はまさにモロッコであったということを、2つのかなり異質な旅行記の分析を通じて示したものであった。イタリアのラクイラ大学の A. Turco の Myth and Territory: Steps Toward a History of an Exclusion の報告はフランス語でなされ、科学的地理学の名のもとに、「他者の地理」はそれが本来もっていた神秘化あるいは象徴化という契機を無視し、文化的内容を貧困にしてしまったことを指摘するものであった。トリニティ・カレッジでのセッション終了後、近くのニューマンハウスでアイルランドアカデミーによるレセプションが行われた。

最終日の 19 日は会場を再びアイルランド国立大学ダブリン校に移して開催され、第9セッションは Koelsch の座長のもと、Representing Nature and Culture, Self and Other というテーマで開かれた。キーノート報告はコーク大学教授で現在は Max-Planck 研究所にいる D. Outram で、彼女が強調したのは、啓蒙思想のなかにおける遠隔の土地の知識は、探検家の身体感覚にもとづく証言に決定的に依存していたことで、Hume、Condillac、Locke などを例にこのことが示された。これに続いて Berdoulay による報告 Géographie et modernité: Les avatars du récit は、人間と環境との関係に関する研究は地理学が「科学的」になればなるほど本来もっていた物語性を失ってきたということを批判的に検討したものであった。ロシア科学アカデミーの若い研究者 G. Kostinskiy は、その報告 Naturalistic and Cultural Attitudes towards Geographical Consciousness : The Case of an Idea of 'Place'のなかで、空間、場所、領域および地域という概念の意味をインド・ゲルマン諸語の語源にまで遡って吟味した。スラブ諸語で「場所」が「印を付ける」ことに由来していることなど、興味深い指摘が多かった。イスラエルの I. Schnell の報告 Nature and Environment in Zionist Ideology は、シオニズム運動のなかでパレスチナの自然についてのイメージがどのように形成されたかを分析したものであった。

最後の第 10 セッションは Paasi の座長のもと、Landscape and Identity というテーマでまとめられ、まずノルウェーの M. Jones が The Cultural Landscape Debate in Norway: Changing Usages of a Concept という題で、1930 年代以降現在に至るまでの地理学以外の諸学問分野および計画および行政担当者によって文化景観という用語が、それぞれ少しづつ違った意味あいをこめて用いられるようになってきていることを報告したものであった。地元の W. Nolan: Making Geography: The Irish Country Series は、地理学者としての報告者が、同時に編集者、執筆者そして出版者としてのアイルランドの県ごとの地誌をまとめてきた経験を語ったものだった。オークランド大学で働く韓国の Hong-key Yoon の The role of 'culture and nature' in the selection of Seoul as the Capital City of Korea は、ソウル建設において、風水思想がどのような意味をもったかということを考察したものであった。最後にコロンビア大学の K. Webb は、The Concept of Landscape Evolution と題して、ブラジル北東部における自己の長年にわたるフィールドワークにもとづきながら、この「景観の進化」という概念がどのような意味をもち、また地理思想史研究においてそれがいかに有効であるかを示した。

この日の午後は研究委員会のビジネス・ミーティングにあてられ、フルメンバーのみでなく、多くのシンポジウム参加者が出席して、研究委員会の今後のあり方について活発に意見が交換された。夜は十数マイル

離れたキリネィ海岸のホテルでお別れパーティが、歌ったり踊ったりしながら深夜まで行われたようであるが、私は翌朝の出発（といってもアイルランド内で行方不明になるというものだったが）が早かったので、Dunbar 夫妻と途中からタクシーで逃げ帰った。

5 反省と展望

地理思想史研究委員会が、過去 30 年近くの間、ほとんど毎年のように開催してきたシンポジウムの１つの例として、1995 年 7 月のダブリン・シンポジウムの模様をかなり詳しく紹介した。シンポジウムテーマはあるが、報告の内容は雑多で、かつシンポジウムテーマについての総括的な討論がないではないかという批判が出されれば、その通りであると言わざるをえない。世界の各地で広い意味での地理思想の歴史を研究しているものが集まり、顔見知りになり、シンポジウムの場だけでなく、数日間顔を合わせ、スンポジオンの名の通り酒を酌み交わしながら意見を交換する、いわば社交の場でありお祭りであるといってもよい。しかし過去のシンポジウムをもとにして、いくつかの一貫したテーマをもった研究書や雑誌の特集号が出版されているし、またいくつかが現在準備中なのであるから、国際的な研究協力体制を生み出すのにシンポジウムが重要な役割を果たしてきたことは、やはり認められるのではないだろうか。私の経験から言えば、シンポジウムに出席すること、特に報告をすることは大変な刺激になったし、さらにそれを外国で出版する場合には、編集者から非常に手厳しい批判、注文が沢山つけられるので、大変な勉強になった。

IGU と IUHPS に所属するこの地理思想史研究委員会の活動を日本の学会に紹介することは非常に重要であるが、1970 年代の初期の段階では辻田右左男が、1977 年のエディンバラ・シンポジウム以降は私が、それなりに紹介に努めてきた。紹介の場としては、1979 年以降は科学研究費による地理思想史研究会が多く利用されたし、日本地理学会における地理思想史研究のための研究グループ、作業グループの集会、あるいはシンポジウムが利用されてきたが、このような形で長い文章を書いたのは初めてのことであり、その点では今まで怠慢であったと反省している。

また日本からのシンポジウム参加者は必ずしも多くなく、北京シンポジウムを別にすれば、１－２名というのが普通である。また *Geographers: Biobibliographical Studies* への寄稿は、全 16 巻中 4 篇（辻田　2 篇、源昌久　1 篇、竹内　1 篇）で小田内通敏、牧口常三郎、辻村太郎、田中啓爾などまだまだ取り上げられるべき日本人地理学者は多い。他方、科研費による報告書のかたちをとって 1980 年に第 1 号が、1996 年に第 6 号が発行された *Japanese Contributions to the History of Geographical Thought* に対する委員会関係者の国際的評価は非常に高い。

先に述べたように IGU の研究委員会の任期は 4 年であり、4 年ごとの総会において、その存続および委員長が承認されなければならない。1996 年夏以降の研究委員会については、1993 年のサラゴーサ・シンポジウムの時から私と Buttimer との間で色々と話し合われてきたし、今回のダブリン・シンポジウムにおいてはフルメンバーだけの会合でいくつかのことが決定された。まず、ハーグ IGC であるが、第 23 回 IGU 組織委員会の方針に従って、本会議期間中に、本会議会議場で、本会議の共通テーマ Land, Sea and Human Effort にそったテーマで研究委員会のシンポジウムが開かれることになり、Charting the Sea / Penser la mer というテーマで、海洋空間および海洋資源についての地図的、文化的、経済的および政治的理解がさまざまな文化のもとでどのように発展してきたかということが議論されることになっている。そしてこれもハーグ組織委員会の複数の研究委員会の合同セッションを企画するようにという方針に沿って、海洋地理研究委員会と合同で、Images of the Sea: Maritime Cultures, Geopolitics and Seapower/ Images de la mer: cultures, géopolitique et puissance maritimes というテーマのセッションが開催されることになっている。

研究委員会の将来については、現在の 10 人のフルメンバー中 6 人が二期 8 年を務めており、IGU 定款の規定により、委員長にならない限りフルメンバーには再任できない。1994 年以来の委員長 Buttimer は IGU の副会長に立候補することが決定しているので、研究委員会の委員長に立候補はできず、ダブリンでのフルメンバーの会議で、Berdoulay を委員長候補にして 1996 年から 4 年間の地理思想史委員会設立を IGU 執行部に申請中である。フルメンバーの顔ぶれは大きく変わるであろうし、若返りが期待される。Berdoulay はバークレーで Ph.D を取得しているが、フランス語が母語なので、セクレタリーにはやはり英語を母語にする地

理学者が必要で、イギリスからという線で目下交渉中である。*Geographers: Biobibliographical Studies* の編集には、Armstrong が協力するかあるいは彼が編集責任者になることになるであろうが、まだ決定的ではない。History of Geographical Thought という名前での研究委員会の新設を申請しているのであるが、最近の情報によると、IGU 執行部の内部では back to the future 的に発想を転換して、History and Future of Geographical Thought とか Geographical Thought and the Future という名前の研究委員会なら、総会に提案できるのではないかという意見があるとのことである。歴史研究が将来の展望を研究者の問題意識として内包していることは当然であるから、この世紀末の乱世において未来などという軽い言葉をやたらに掲げない方がよいというのが私の個人的意見であるが、世紀末だからこそ未来という言葉がほしいという御仁もおられるのだろう。研究委員会として承認されることを第一に考えれば、名称変更も有り得ないことではない。しかし、IUHPS の科学史部門にも所属している研究委員会としては、IUHPS の委員会としてそのような back to the future 的な名前を冠しても構わないのかという問題が残る。

ハーグ IGC を機会に、私は消えていくのみの老兵となる。日本の新しい地理学世代が、この研究委員会に積極的に参加して下さることを祈願して本稿をしたためた。(1996/2/24)